

# 随想

## いまどきの六十歳以下

### 小川和久

(国際政治・軍事アナリスト)

71年大学神学部中退

先日、とある公の会合で有名な官僚OBに口答えして、恐らくは不興を買っただろうと思われる一件があった(別に構ったことではないが)。

われわれ八人の委員を前に、スピーカーとして呼ばれた件の官僚くずれは言い放った。国際



派で鳴らす七十歳前後の人物である。

「いまどきの日本人はダメだ。特に六十歳以下はクズみたいなものだ」

本題に入る前、のっけからの罵詈雑言だから、前の会合あたりでよほど気分を害することがあったのだろうとは思った。それこそ、六十歳より若い誰かさんにやり込められたのかも知れない。

しかし、会合の主旨とは関係ないことだし、気分を悪くさせられるいわれもない。委員のう

ち六十歳以上は一名だったこともあって、ピンと緊張した空気が漂った。

私自身のことを言えば、会合の前に出された食事の時からこの人物が気に入らなかつた。マスコミが伝えるイメージからは程遠い立ち居振る舞いが神経を逆無でした。

海外勤務の経験が豊富というにしては、どうしてクチャクチャ音を立てて食べるのだろう。どうして、シーハーシーハーと爪楊枝を使うのだろう。どうして、絶え間なく貧乏揺すりをするのだろう。あんな、他人のことを言える柄かよ——。

五十九歳以下の七人の委員を代表して、キレてみせることにした。

「失礼ながら、電車に乗るようなお立場ではないのでご存じないかも知れませんが、この頃の老人、それも七十代から下のジイさん、バアさんの振る舞いといったら、これが日本人かと情

けなくなる。ご指摘の六十歳以下の問題も、もとはといえば前の世代の産物です。日本人の在り方ということになれば、四代ぐらい前からおかしくなっていると思うのですが」

むろん、単なるマナーの話ではない。世界のどこに出ても通用する日本人かどうか、その内容のレベルは、まず身のこなしに現れると言いたかつたのだ。

明治の先人たちを思い出してほしい。高等教育を受けた人は少ない。世界の情勢を熟知していたわけでもない。外国語に堪能だつたわけでもない。テーパーマナーなど知る由もなかつた。だが、それでも新島襄のように世界に通用した。それは、日本人としての最低限の挙措動作が国際水準を満たしていたからにほかならない。

あの日本人はどこに行つてしまったのか。官僚OBから反論は聞かれなかつた。

## 文化は、ラストバッター

### 日下部吉彦

(音楽評論家、大阪音楽大学ギ・カレッジ・オペラハウス館長)

52年大学文学部英文文学科卒業

いま日本を、大ゆれにゆらせている銀行、証券会社の倒産騒ぎも、ひとことでいえば、バブルの「後遺症」といえるが、文化の面でも同じようなことがある。ここ数年の間に、全国各地で雨後の筍のように建設されている「文化会館」は、まさに「バブルの置土産」だ。

もちろん文化会館そのものは、結構な施設だが、それが建設されるときは動機や目的をみると、必ずしも手ばなしで喜んではいられない。いま全国で三百に近い文化会館がお目見えしているが、そのほとんどはバブル期に計画され、着工、そして完成したときは、すでにバブル

がはじけていたというわけ。

戦後の日本の文化行政というのは、先進各国とくらべて格段にお粗末。欧米では、戦争が終るや否や、まっ先にオペラハウスを復旧させたり、コンサートを再開させているが、わが日本では、まずハラ一杯に食べるのと、その次に身につける衣服、そして住宅の順であった。もちろん、戦後のひどい生活を考えれば、このことは無理からぬことといえるかも知れない。

しかし、「文化」の順番は、いつまで待っても来なかった。そしてバブル。おカネが余って使う道がなかった。どこからとなく聞こえてきた「文化」の声。戦後五十年がたつて、やっとスポットライトが当たった。

各自自治体で、文化会館建設競争が始まった。壮麗な大ホールと小ホール、そしてなぜか、プラネタリウムが併設された。隣り町が建てたから、ウチもやろう……という「お隣りの論理」。

もとより、建てたあと、何に使うかといったウイジョンがあるわけではない。ハコだけ造って、なかになにを入れるかまでは考えていない。ハード優先、ソフト無視という図式が出来上る。

これではいけない、と立ち上った人たちもいる。91年に結成された全国音楽ホール・ネットワーク協議会には、いま六十館が加盟して、知恵を出し合い、情報を交換、共同企画を立てたりしている。ほとんどが各自治体経営のパブリックホールだ。不況のなか、どことも財政事情の悪化のなかで、何とか文化の灯を消すなど、悪戦苦闘している。お役所の通例で、文化ホールだからといって、それにふさわしい有能な人材をあてることはなく、たまに適材がいたかと思つて、二、三年で異動させられてしまう。カネなし、ヒトなし、チエなしの三重苦が文化ホールの悩みだ。

しかしこれらは、必ずしも行

政だけの責任ではない。それを支えるはずの議会の無理解が、大きなネックとなっているケースが多い。「文化は票にならない」と議員たちは、ドブ板の修理にばかり精を出す。そんな議員を選んでるのは、有権者、つまりは市民だから、結局は、天にツバキすることになるか。

## 代用食研究、そして タコ焼へ

### 熊谷真菜

(タコヤキスト・生活文化研究家)  
88年同志社大学大学院文学研究科  
新聞学専攻修士課程修了

「たこ焼を研究テーマにとることは、もうやめてもらいますよ」。

立命館の卒業論文「現代食文化論——大阪文化としてのたこやきとその象徴的意味論」を持つて、同志社大学大学院の入学を受けた。新聞学科の北村日

出夫先生と竹内成明先生が面接の試験官である。新聞学修士課程に、たこ焼研究が不適切なのは、なんとなく感じていたし、二年間みっちりたこ焼ばかり食べ歩き、フィールドワークした直後だから、私としても、たこ焼から早く卒業したい一心で、「もちろんです」と答えたものだ。

’85年といえば、グルメブームの起こる前で、食文化という表現も一般的ではなかった。まして学問の研究対象に設定するなど、言語道断といった風潮もあった。でも食意地のはつてる私は、食べものをモチーフにして、調査を続けたい気持ちが強く、苦し紛れに「代用食」を選んだ。

「代用食の思想——戦中戦後の食品意識形成に関する考察」  
こんなタイトルの修論を書き上げたのは三年後。今出川の図書館の書庫で、戦時中の新聞をマイクロフィルムで閲覧して史料

を集めた。米の主食に対して代用の食は、食糧難のなか、人々の飢えの体験に深く根ざした意識だが、新聞上ではほとんど敗戦後まで登場しない。代用食ではなく、栄養食、国策食、国民食、決戦食。イメージのいいネーミングで、「おいしい戦時型パン」(大阪朝日新聞昭和十九年七月二十二日)といったレシビの記事が紹介された。

米は粒のまま食べるから粒食。それに対して代用食は、小麦を中心とした穀類を粉にして食べる粉食。皮肉なことに、戦後は米ばなれも起こり、パンやラーメン、お好み焼、パスタ、ピザといった粉食への志向が強くなっていく。代用食研究のなかで、たこ焼の意義を見出せたような気がした。

そして近年のたこ焼ブーム。’93年に出した『たこやき』(リプロボート刊)は、類書がなかったということもあって話題になり、そのころから東京を中心

にたこ焼店が増え続ける。フリーピンで焼きされたたこ焼も冷凍たこ焼として輸入され、たこ焼器がギフトとして百貨店に置かれる。

パブルのおかげで一億総グルメリ化したあとに求められるのは、シンプルでおいしいもの。客の目の前で焼きあげられるたこ焼には、高級料理には真似できない、素材なかわいらしき、楽しさがこめられている。なぜかほっとできるたこ焼的な時間と空間。たこ焼人気はうなずける現象ともいえるのだ。

## 新作バレエへの情熱

### 小西裕紀子

(松垣バレエ団)

’81年大学文学部文化学科  
国文学専攻卒業

景気が良くないと、その影響を一番に受けるのが芸術です。

特に、バレエやオペラなどの

総合芸術と呼ばれるものは、贅沢な金食い虫ですから。

たとえば、白鳥の湖全幕を上演するには、オーケストラ、舞台装置、時代考証に基づく百着以上の衣裳、そして踊り手が必ず要です。

’97年9月から、文化庁芸術家在外研修員として3カ月滞在したベルリンでも同じでした。

最近、プレミア(初演)でも客の入りが良いとのこと。

もともと、ベルリンでは、国や市が、オペラ劇場の財政面を援助するため、豪華なキャストの公演でも日本での半分以上の料金で広く一般市民に提供することができますし、シーズン毎に、新作を上演することも可能です。

週末、普段着のラフな格好で家族揃ってバレエを鑑賞する光景が、ちつとも特別なことではありません。

ここ、日本の場合、やっと待望の新国立劇場が完成しました

が、そこで踊るダンサーは民間のバレエ団からの借り物といった具合で多くの問題を抱えての出発です。

まだまだ個人的なレベルでバレエに携わっていかなければならないのが現状です。

バレエ公演に大きな助けとなっている、日本芸術振興基金助成制度も今の景気の中では期待薄となっています。

このような状況の中で、我がバレエ団は、白鳥の湖、ジゼル、コッペリア、シンデレラ等のクラシックバレエのレパートリーに加えて、日本独自のバレエ上演に取り組んでいます。

民話を題材にした「絵姿女房」、近松の「曾根崎心中道行」、「雨月物語」の浅茅が宿から「雨月物語」待つ女」を91年から上演してきました。

今回のベルリン滞在中で、大陸の人の作品に触れることによって、さらに、日本のバレエの創作意欲を掻き立てられたのは、

言うまでもありません。

しかも、古都、京都に在住する身、京都から世界へ向けての作品を目ざします。98年は恩師向井教授の協力を得て、「みつこ・オーストリア伯爵夫人」に取り組みます。

バレエが、広く一般の観客を得ることができるとは早く来ることを願って、創作に取り組んでいきたいと思えます。

## 「パリの憂うつ」

### 関本範枝

（OECD経済協力開発機構・パリ本部人事担当アドミニストレーター）

87年大法学部法律学科卒業

私のパリの仕事場には「パリの憂うつ」というボードレールの詩集がおかれている。この本のタイトルをみてニヤリとした日本人職員はまずいない。もちろん彼らは自分達それぞれの「パリの憂うつ」に思いをさせて

いるのである。ちなみに私のつとめているOEC Dには職員二千人、国際機関であるにもかかわらず半分近くがフランス人で日本人はわずか約七十人。こんな風に私も含めて日本人職員は公私ともに、どっぷりとフランス文化につかっているのである。ともあれ、その「パリの憂うつ」とは？

フランス人はすることが遅い。彼らには「効率」はそれほど重要なことではないらしい。特にせつかちと評される大阪人の私には非常に耐えがたいものがある。今朝も私はパン屋で待たされた。次が私の番という時に店員が前の客と犬の話を始めた。例のごとく私の後には列ができるがイライラしていたのは私だけのようであった。自分の番になって、「さて何を買おうかな」と考え始めてもいいのである。こんなテンポになれてしまったせいか、大阪に帰るとノロノロしている私は後まわしにさ

れたりする。秘書にしても日本人なら十分位で出来ることも平気で三十分位かけてやる。へたをする、後まわしである。私があるフランス人秘書に日本人の能率のよさを語ると、次のような答えが返ってきた。「急ぐのは何故か？ それは急いで待っている人がいるから。フランスには急いで待っている人はいないの。サービスを期待しない、それがフランス人というものよ」私が悟されてしまった。この理屈を誰もがこねるというのもパリの憂うつのひとつだ。犬のフンがあちこちに落ちていてパリの街は汚ない……と「憂うつ」をあげればきりが無いが、実はパリは私にとっては悪いところではない。住んだ七カ国の中で一番くらしやすい都市だと思う。都会でありながら効率を考えないパリの人達は、昔ながらのつきあいをしてくれる。理屈をこねては私を怒らせた家主のC氏は、テロ爆破がおこって一

時間以内に、バカンス先から電話をしてくれた。仕事でゆきづまった時に部屋にやってきて、「あなたの方が、私は正しいと思う」といつてくれたりするのには必ずフランス人だったりする。税関でいじわるされた時、「外国人女性にあんな口のきき方をするフランス人男性は許せない」と私のまわりのフランス人は大声で怒り始めたり。そのくせ、人のことには干渉せず、みんなが違う考え方をするのが自然だと思っている人達。そんなわけから、パリを離れられないでいる。

## ライフ・ゴーズ・オン

~Life goes on~

### 武田一朗

(南カリフォルニア日系商工会議所会頭)  
78年大学経済学部卒業

一月十五日、ロサンゼルス市

の日本人街「リトル東京」のホテル・ニューオータニで、私は南加日系商工会議所(日商)会頭として、三期目の就任式を迎えた。日商は一九〇五年に、日系社会の中核団体として創設された南加最古の団体である。現在、三十万人を超える日系コミュニティの、米国社会に於ける地位の向上と福祉増進、日米友好関係の促進を目指し、政治、経済、教育、文化、社会福祉の各分野で日々活動を続けている。一口に日系社会と言っても、

パイオニアと呼ばれる一世、二世。米国生まれで戦時中は日本に住み、戦後帰国した帰米二世。三世、四世、五世。また、日本ビジネスの米国進出を背景にした企業駐在員、留学生、戦後渡米して永住し現地化したビジネスを展開する新一世等の在留邦人。背景、生活環境、物の考え方、異なる人々が日系社会という一単位を構成し、そしてその日系社会が、多人種社会米国の

中のひとつのマイノリティ・コミュニティとして全体の中の一部を構成しているという、多重構造になっている。

そのひとつの単位としての日系社会が、今、二十一世紀を迎えるに当って大きな壁、アイデンティティ・クライシスに直面している。黒い髪、黒い瞳の、見掛けは日本人だが、世代を経る毎に、日本語を始め日本文化との距離が遠くなり、非日系他民族との結婚も増加し、日本的なものが益々希薄になって来ている日系人。では在留邦人と日系米人が日本人同士として理解し合っているかと問えば、答えはノーである。ある種の反目さえ感じられる。他方、日系社会の外の米国社会、所謂「白人社会」の中では、確かに一世、二世の時代よりは受け入れられているものの、所詮はアジア系民族に対する差別が根強く、ある一線を絶対に超えられない限界が存在する。

今、日系社会は、自らの存在を規定する座標軸を模索している。自らの居場所が解らず漂っているほど不安気持はない。但し、そうしている間にも、ただじっと考え込んでいる暇もなく、次から次へと外界からの矢が飛んで来る。矢を避けながら、自らについて考えながら、そして前進を続けていかなければならない。正に待ったなし、「ライフ・ゴーズ・オン」である。

このように改めて見詰め直すと、時たま私は、自身の置かれた立場の重さに慄然とし、足元の床が一瞬にして抜け落ちてしまうような精神的無重力状態に陥ってしまう事がある。しかし次の瞬間我にかえり、敢えてすべてを忘れ、何も考えないように努めている。そして「ライフ・ゴーズ・オン」である。頑張らなくてはならない。

さて、この海の向こうのカリフォルニアの話を、世界の中の日本に置き換えてみれば、国際

化などという意味不明の空々しい言葉を繰り返すより、やはり「ライフ・ゴーズ・オン」?

「ライフ・ゴーズ・オン」。世界の何処に住んでいても、みんな元気を出して頑張ろう。

## 「Assistant to Teachers of Japanese」ロンドンに参加

### 菱倉衣里

〔関西国際学友会日本語学校非常勤講師〕

96 女子大学学芸学部

日本語日本文学科卒業

「おはようございます」先生、お元気ですか」

教室のドアを開けると、たどたどしい日本語で、それでも元氣な挨拶が毎日私を迎える。国籍もバックグラウンドも全く違う者同志が机を並べて日本語を学んでいる。言葉はあまりできなくても教室から笑いが絶えることはない。世界共通の笑いつ

てあるのだなあと、実感する今日この頃である。

一方、国と国との微妙な関係が何となく肌で感じられたり、国籍が複雑な学生がいたり、平凡な日本人の家庭に生まれ育った私にとっては新鮮で、発見することの多い毎日を送っている。自分のアイデンティティーについて考えさせられることも多い。

オーストラリアで同じような経験をした。私は、大学を卒業してすぐの一九九六年四月より一年間、オーストラリア・ビクトリア州の教育庁と同志社女子大学を含めたいくつかの大学との提携で行われている「Assistant to Teachers of Japanese」プログラムの一期生として、メルボルン郊外の公立中学で日本語の授業のアシスタントをさせていたのだ。

伝統文化ばかりでなく、今の日本の子供達の姿が伝えられたらという気持ちで現地に赴いた

私を迎えてくれたのは、あふれる好奇心と屈託のない笑顔で話しかけてくる中学生達であった。すぐに彼らのことが大好きになった。けれども「日本人は何故家上がる時靴を脱ぐの?」「なぜお辞儀をするの?」

こんな彼らの素朴な疑問に、なかなか的確に答えることができなかった。移民の国オーストラリアの学校には、実に様々な人種の子供達がいる。それだけにそれぞれの祖国に対する思いや、他の国に対する関心も強く、彼らは自分をきちんと主張する。「日本人としての誇りを高く持つて頑張るべきささい」。日本を発つ時にある方から送られたはなむけの言葉が、後になって痛切に感じられた。

そうしてなんとなく自信を失いかけていたときに、学校で、全校生徒が日本とイタリヤの文化を体験する文化祭をすることになった。口では漠然としていてなかなか説明できなかった日

本という国を知ってもらえる絶好のチャンスとばかりに、準備を重ねて迎えた当日。他のアシスタントの仲間にも手伝ってもらって、剣道、茶道のデモンストレーションや、折り紙、日本食の試食、カルチャー・トークなどを通して日本を紹介し、大成功の内に終えることができた。以来、子供達の日本や日本語への関心も一層高まり、私も「よし、これで行こう」という何か主張を持って、彼らに接することができるようになったように思う。

こんな経験も含め、オーストラリアでの一年間は、日本や日本人について改めて考えるきっかけともなり、今の私にとってかけがえのないものとなっている。

このようなすばらしい機会が与えられたことに、今、心より感謝している。

# 七月十七日のこと

## 廣瀬量平

(作曲家・女子大学嘱託講師)

昨年の新緑の頃、突然同志社女子大学から、作曲専攻の学生の指導を、とのお話があった。

私は二十年前東京からやって来て京都市立芸術大学に十九年間在任し停年退職したばかりであり、特に最後の四年間は音楽学部長でもあり、その激務から解放されてやっと作曲家としての創作三昧の自由な生活に入ろうとしていた所であったから考慮する余地もないわけではなかったが、何故か二つ返事で承諾してしまい、早速夏休前の七月から田辺キャンパスでの授業に出かけることになった。そしてその上、認可されたばかりの大学院の「日本語日本文化専攻」

の講義も引き受けてしまったのである。それは同門の作曲家原加寿子教授が急病で療養が必要という緊急事態に対する応援、というものであったのだが、それだけでない何かを感じた。

ところで私は北海道函館の生まれである。父は九州長崎県出身だが、母の家は江戸時代から函館で造船所を営み、五代前の續豊治は幕府船大工棟梁であり、ペリーが函館に来航した折、それを観察して独力で多くの洋船を建造し、名字帯刀をゆるさるれ、後従五位を贈られた。昭和十年代に歌舞伎座で「洋船事始」なる歌舞伎が上演され、主役の豊治は六代目菊五郎が演じ、その戯曲は六代目の描いた画で装訂され出版された。

その豊治の長男が私の母方の先祖。そしてその弟卯之吉は造船ばかりか、天文観測、気象観測、地形測量、更には英和対訳辞典も作り、勿論英語もよくし、二十六歳のとき来函した五歳下

の新島七五三太(当時二十一歳)を知り、その志に感じ、犯す者は死罪という鎖国の国禁を恐れず自ら小舟を漕いで予め交渉してあった米国船に乗船せしめたのである。それは元治元(一八六四)年七月十七日のことであった。

私が子供の頃知っている曾祖母の叔父がこの卯之吉であり、後に名は福士卯之吉、更に福士成豊と変わった。

二年後の一八六六年二月二一日、新島はアメリカ本土よりはじめて江戸の父へ候文の書簡を送りフィリップスアカデミーへの入学を告げているが、その二日後の二月二十三日、「福士さん！」という呼びかけではじまる手紙を書き送っている。その中で「友よ、ぼくは君の親切にむくいるすべがありません」とあり、父には書かなかつた下宿のことや学校のことなどを親しく報告している。そして「日本はまだキリスト教は禁止です

ね」とも書き、(彼等は英語で文通していた)自分の写真も同封した。卯之吉はその写真を部屋に置き毎日英語で話しかけていた。

その後彼等が再会したのは明治十五(一八八二)年三月十四日の京都であった。その五年後、明治二十(一八八七)年彼等は札幌で共に一夏を過している。このようなことが私にどのよう作用しているかは知らないが、少なくとも私が子供の頃遊んだ函館港の岸壁には今、「新島襄脱出の地」の碑が立っている。彼等が共に命を賭けて脱出を決行したのは陽暦七月十七日だが、その六十六年後の同じ七月十七日にそこからほど近い所で私は生まれた。偶然かもしれないが、私としては先祖の一人が命がけて援助した結果出来た学校が、今どうなっているかを見てみたいと思ったのかもしれない。

## タイムマシーン

藤江佐一郎

(エイジアン・ホンダ上級副社長)

64年大学文学部文化学科  
教育学専攻卒業

昔、タイムマシーンに乗って過去と未来を往復する映画があった、未来はともかく過去に行けば大金持ちになれるのと思つたものです。

仕事の関係でカナダ、日本、タイに住み、私もある意味でタイムスリップを経験している、と言うのは、途上国は先進国が歩んだ道を行く筈である。

私が今居るタイはバブルの崩壊で経済はドン底に落ちている。赴任した'90年当時、正にバブルの真最中。高いGNPの伸びに加え株、土地、建物への投資が盛んであった。日本が'90年を境にバブル崩壊が始まり、土地、建物の下落が始まって居る

と言うのである…。

途上国は発展の余地が有りドンドン発展するだろうとそれなりの理屈があった。日本に比べ経済全体の底は浅いと言いながら身近な処で株、ゴルフ会員券等値上がりを期待して、投機にはしり日本のバブル時と同じ轍を踏んでいる。又この様な時にはタイ経済の将来性について如何に発展し続けるかを理論的に説明する人がいるものだ。聞いていて成る程と思うから不思議だ。

なにを隠そう私自身日本において一番高い時にアパートとゴルフの会員権を買い、又タイに来て一番高い時にゴルフ会員権を買い値下がりでどこか売るに売れない状態で学習効果ゼロ。自分の事だけに余計腹がたつ。

日本で経験しているのにどうして分から無いのだろうか。土地建物等が実需に基づかない異常な状況はバブルだ、とか言う人がいるが結果論と言う事を身

を持って経験してきている。

渦中に居ると判断を誤り易いのは情報が偏る為ではないか。良い時は良い情報、悪い時は悪い情報ばかりが氾濫するため、分からなくなつて来る。

ある時ジャーナリストに、どうして時流に乗った記事ばかり書くのか聞いた処、反対の事を書くと売れないからとの返事だった。

タイムマシーンで昔に行ければ、もう一度大学に行く事が出来れば、あの科目だけは一生懸命勉強するのにと悔やむ事が有りますが、実現出来たとしても遊びを含めた他の世界に目を奪われ結局は同じ結果に終りそう。

何故なら、過去に行かなくても自分に一番近い遺伝子を持つた子供達の学生生活を見れば、何度行っても同じ様な過ごし方しか出来ないのかなあ、とも思われまます。

名前は忘れましたが誰かが次

の様に言っているのを見ました。

「過去を見定めるのは、未来を予想するより難しい」と。

結局、タイムマシーンに乗って過去に行つても金持ちには成れない。

女性が21世紀の文明開化をリードする

水上洋子

(作家)

73年大学文学部文化学科  
文化史学専攻卒業

最近、ある講演でお会いした男性がこんな話をした。ベトナムの女性から日本は先進国のはずなのに、何故、こんなに大きな男女差別があるのか、と問われて、額から汗が滲むほど恥ずかしかったとか。

ベトナムだけではなく、ほかのアジアの国々の女性の社会進出は目覚ましく、男女が平等に

働ける状況が整いつつある。だが相変わらず日本では、企業でも政治でも学問の場でも差別がまかり通っている。男女平等という点では、日本は後進国といつてほぼ間違いない。

たとえばテレビ中継で見る国会は灰色で、背広の男性ばかりで埋め尽くされている。日本の女性国会議員は、なんと二・四パーセント（一九九六年の統計）しかないなく、これは世界ランキングの一四位である。女性の国会議員の一位はスウェーデンでは四二パーセント、ノルウェーでは三九パーセントであり、半分とはいかないがそれに迫っている。さらにニュージーランドやトルコ、フィリピン、ノルウェー、フィンランド、パキスタンなど、女性首相に任せた経験を持つ国も増えてきている。だが今の日本では、それは夢物語でしかない。

こうも揺るぎない男女不平等の土台を作ったのは明治維新に

あると私は考えている。

明治維新で活躍し新しい国の指標を作つて名を残しているのは、男性の英雄ばかりである。それらの英雄を助けたという女性の名も残っているが、彼女たちはあくまでも脇役。つき詰めれば明治維新は、サムライ主導型の改革であり、日本の八〇パーセントを占めていた農民すなわち庶民や、女性の声は反映されなかった。文明開化の時代に男だけで改革が進められ、国家の体制が整えられたことが、未だに日本の社会に影を投げ掛けている。

今や世界でも恥ずかしいほどの男女平等後進国となっているのに、その改善はなかなか進まない。気がつくくとエリート官僚と政治家と大企業が癒着する政治が続いて、凄まじいばかりの環境破壊にいたっている。

男女差別の問題をスマートに解決するひとつの方法は、ノルウェーで始まったクオータ制度

だ。これはあらゆる公の議会に、異性の四〇パーセントが参加しなければならぬとする制度である。今やノルウェーのほとんどの政党はこれを取り入れていく。まずは意思決定の場に女性をどんどん参加させなければ、今の状況は百年たつても変わらないだろう。

平成維新は、男女が対等に入り交じつてやりたいものだ。そうでなければ二十一世紀にふさわしい、質の高い文明開化は認めないのではないか。

## ヨーロッパお菓子事情

### 安田俱子

（洋菓子研究家）  
55年大学文学部  
英文学科卒業

ヨーロッパのお菓子や料理にたずさわつて三十年近くがたちました。ここ数年、我国のマスメディアに料理が登場しない日

はなく、日本人全体が食べることに熱中しているようにさえ思われますが、味というものは伝える術のない厄介な代物で、いくら形容詞を並べても味はおろか、香り、舌ざわり、口どけ等何一つ伝えることは出来ません。食べてはじめて理解、納得出来るものなのです。そのため、この二十数年間、伝統の味、新しいレシビを探してヨーロッパ各地を食べ歩いて参りました。この間にお菓子を通して見聞した各国のお国ぶりを。

お菓子といえは先ずフランス。現在、世界をリードするフランスのお菓子は、一五三〇年イタリア、フィレンツェのカトリヌ・メデイチが皇太子アンリ三世に嫁ぐ際に連れて来た菓子職人からはじまりました。この国は世界有数の農業国です。お菓子作りに最適の良質の乳製品や小麦粉が採れ、果物の種類も豊富です。一年間の宗教行事や伝説にちなんで焼くお菓子が

あります。それにフランス人の  
エスプリをたっぷり盛り込んで。  
その例に「ペ・ド・ノンス」  
(尼さんのおなら)というお菓子。  
シュー生地が油の中でフワ  
ーとふくれる様子からのネーミ  
ングです。それにしても何故「尼  
さん」なのでしょうね？

お隣のイギリスでは、お菓  
子にも伝統を大切にするお国柄  
がみられます。ヴィクトリア女  
王時代のレシピが今尚そのまま  
使われています。バターや砂糖  
たっぷりのスポンジケーキが主  
流で、お菓子好きの人間にもい  
ささか重たいものです。それで  
もこの国ではアフタヌーン・テ  
ィーの習慣もあってお菓子を食  
べることに大きな関心を持って  
います。食事の際に、彼等がス  
ィーツと呼ぶデザートに力を入  
れて、メイン・ディッシュより  
立派なことにしばしば出会  
います。

ベルギー。この国では、所謂  
スポンジケーキ系の軽いお菓子

は見当らず、ケーキというのは  
リースト生地のパン菓子。それ  
にフルーツいっぱいのパイ、ス  
パイスのきいたクッキー等が店  
先に並びます。代わりに目につ  
くのが、チョコレート専門店。  
チョコレートは「生もの」で、  
食べ切れるだけ買うものと教え  
られました。

そして、イタリア。ここにも  
スポンジ系のお菓子は少ない。  
パスタやピッツアに適した粉で  
はグルテンが強過ぎて、スポン  
ジが上手く焼けないのです。そ  
の代わり豊富な果物を材料にし  
たフルーツ・サラダやジェラー  
トがとて美味です。それにテ  
ィラミス、パンナコッタといっ  
たチーズをベースにしたデザー  
トも。いずれにせよ、イタリア  
は地域意識が強く、今もって都  
市国家時代の食文化を頑なに守  
っています。イタリアを代表す  
るお菓子という表現は難しいの  
です。

ここで声を大きくしたいのは

「お菓子は決して女、子供のもの  
ではない」ということ。洋風料  
理には砂糖を使いません。それ  
で必然的に食後に甘いものが欲  
求されます。“Cake hall”とい  
うことばがあるように、デザー  
トの入る所は別なのです。美味  
しい料理の後で男性が嬉しそ  
うにデザートメニューを眺めて  
いるのは微笑ましくて良い光景  
です。日本の男性方も大いに甘  
いものの美味しさに目覚めて頂  
きたいと思います。甘味が不足  
すると、情緒不安定になると科  
学的にも立証されています。  
これからも未知なる味をもと  
めて旅に出、新しいレシピをお  
伝えしたいものと思います。

(42ページからつづく)

#### ■キリスト教文化センター公開講座

週1回90分の以下の講義を1年間(29回)実施する予定です。詳細のお問い合わせは、3月下旬にキリスト教文化センター(☎075-251-3320)まで。

〈田辺校地〉「キリスト教と日本の近代詩」「モーツァルトの世界」「現代キリスト教入門」  
「20世紀フランス思想を読む」「家族はどこへ行こうとしているのか」「考古学  
と比較文化論」「手話」「点訳」

〈今出川校地〉「聖書のギリシャ語入門」「朝鮮の説話と民衆意識」「音楽解剖学」「聖書を  
原典で読む」「戦後思想と人間」「児童文学の読む楽しみ書く楽しみ」「手話」  
「点訳」